

ど高率に検出される傾向があり、滲出性中耳炎の好発年齢などを考えればその病因と深くかかわっていることが推測される。

最後に検出菌の抗生物質に対する感受性であるが、インフルエンザ菌が CEX, 黄色ブドウ球菌が ABPC で感受性が低い他は全般的に感受性は良好であった。

5) Habekacin 点眼による眼内移行

大桃 明子・大石 正夫 (新潟大学眼科)

(目的) 新しいアミノ配糖体抗生剤, Habekacin (HBK) の眼内移行の動態につき検討した。この度は点眼による眼組織内移行につき報告した。

(方法) 注射用 HBK 50mg を生食水にて溶解し、0.3% 水溶液 (pH 6.0) を作製した。体重 2kg 前後の健康白色成熟家兎眼に 5 分毎、5 回点眼して経時的に眼球を摘出し、眼組織内の HBK 濃度を測定した。点眼は正常角膜眼 (非炎症眼) と NaOH 腐蝕眼 (炎症眼) について行った。HBK 濃度は、*B. Subtilis* ATCC 6633 を検定菌とする薄層平板カップ法により測定した。

(結果) 非炎症眼では良好な眼内移行は得られなかった。炎症眼においては外眼部組織、眼球内部組織ともに移行濃度を認め、また角膜においては、*S. aureus* 及び *P. aeruginosa* の 80% 発育阻止濃度を上まわる移行濃度 (0.41~7.57 $\mu$ g/g) が示された。

(結論) 0.3% HBK の点眼は細菌性眼感染症とくに角膜潰瘍などの角膜感染症に対する臨床応用が期待されるものと考えられた。

6) *P. aeruginosa* アミノ配糖体薬剤感受性

米山 恵子・坂上富士男 (新潟大学眼科)  
大石 正夫

眼科領域において最近の抗生剤点眼薬の開発は、アミノ配糖体が主体であることから私共は今回、*P. aeruginosa* に対するアミノ配糖体薬剤感受性を検査した。

方法: 1981~1984年に麦粒腫、涙囊炎、角膜潰瘍、全眼球炎などの患者から分離された *P. aeruginosa* 20 株について、KM, GM, DKB, TOB, SISO, MCR, AMK, HBK の 8 種のアミノ配糖体薬剤の感受性を日本化学療法学会標準法に準じて原液接種にて MIC を測定し、又、血清型別についても調べた。

結果: 感受性分布では、KM は 50~>100 $\mu$ g/ml, AMK と GM は 1.56~ $\geq$ 100 $\mu$ g/ml, HBK は 0.78~50 $\mu$ g/ml, MCR と DKB は 0.78~>100 $\mu$ g/ml, TOB

と SISO は 0.39~ $\geq$ 100 $\mu$ g/ml を示した。また 12.5  $\mu$ g/ml 以上の耐性株出現率は、KM は 100%, AMK, HBK は 45%, DKB は 35%, GM と MCR は 30%, TOB と SISO は 5% であった。*P. aeruginosa* の血清型別検査では、E 型が 8 例で最も多く、B 型, A 型, G 型, H 型の順であった。

7) 最近の臨床分離菌とその薬剤感受性

小林 良彦・金子 智子 (新潟県立ガン  
内山 和美・小林千津子 センター)  
中村 信敏・小林 進

当院において病的材料より分離された菌種は日和見感染原因菌が主流であるが、*Staphy. epidermidis*, *Strep. faecalis*, *Ps. aeruginosa*, *Haemophylus sp.* は過去数年増加傾向が続いている。*Staphy. aureus*, *E. coli*, *Klebsiella* は横這いであり、*Ps. cepacia* は見られなくなった。その抗生剤感受性を S. 59. 8~10 の 3 ヶ月間に分離された全菌株につき Disc による成績を集計した。*Staphy. aureus* は TC 系以外には有効な菌株は少く、*Staphy. epidermidis* は Cephem 系, TC 系が有効、*Strep. faecalis*, *Micrococcus sp.* は PC 系が有効、*E. coli*, *Klebsiella*, *Enterobacter* は Cephem 系, AG 系, TC 系が、*Pseudomonas* には CFS, FOM, AG 系が有効、*S. marcescens* には Cephem 系 3 群の一部, TC 系が有効、*Haemophylus sp.* には PC 系, Cephem 系が有効であった。

8) 臨床分離細菌の  $\beta$  ラクタム剤感受性と  $\beta$  ラクタマーゼ産生能について

柄沢 安雄・樋口 興三 (水原郷病院検査科)  
山作房之輔 (同 内科)

近年  $\beta$ -Lactam 剤が広く使用されるに伴い、耐性菌の出現が問題となって来た。当院では 59 年 5 月に臨床材料から分離された菌種について disk 法で (H) 以上を感受性として感性率を求め、 $\beta$ -Lactamase 産生は Nitrocefin 法, pH 法で実施した。*S. aureus* の  $\beta$ -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法, pH 法とも高率に検出され、PC-G, PIPC に低感受性を示し、PC ase 抵抗性の MCIPC には高い感受性を示した。*E. coli* の  $\beta$ -Lactamase 産生能は Nitrocefin 法 94%, pH 法 20% であった。本菌は R 因子による PCase を有する為 ABPC の感受性は 67% と低く、CS ase は産生量が少ない為 CEZ 79% で第 III CEPs 剤は 95% 以上の感受性であった。*Klebsiella*・SP の  $\beta$ -Lactamase 産生能は